

湘南里川づくりフォーラム2017

基調講演：『『場を作り、野に出て、人に伝える「魚部(ぎよぶ)」という取り組み』
～高校の部活動から、どこの誰でも参加できる「市民のブカツ」的存在～

井上 大輔 氏 (北九州・魚部)



【概要】

井上先生は1998年度、赴任先の高校で「魚部(ぎよぶ)」という部活動を立ち上げ、2012年度まで活動され、2011年に第33回サントリー地域文化賞(2011年)、平成21年度水環境文化賞、2008年に第10回日本水大賞・文科大臣賞、2007年に第42回全国野生生物保護実績発表大会・自然環境局長賞など様々な賞を受賞。

2015年度から「誰でも参加できる新しい魚部」として北九州・魚部を立ち上げ、自然や生きもの、自然と人との関わりに関心がある全国25都道府県の約250名が「部員」となっており、現在も様々な方面でご活躍されている。



講演は井上先生が着任されていた高校で立ち上げた部活動としての「魚部」の話から、現在では、だれでも参加できる「北九州・魚部」が立ち上がった経緯、そしてその中でどのような活動を行われてきたかについてお話いただいた。

何よりも「楽しい」ということを活動において大事にしており、「魚部ってなんか楽しそう」と思われるような活動を継続されている。

魚部には様々な専門家から生き物好きな方、また年齢層も様々な方々が参加しており、専門家から生き物好きな方へ、またイベントなどを通じ世間の方々へ生き物の魅力を伝えており、見る（享受）側から⇒する（発信）側になる場を提供する場ともなっている。

高校の部活時代の魚部は文化祭での企画のための寄せ集め集団だった。しかし、県内全域の川や池、干潟での調査を行ううち、何がいるのか？何がいないか？など専門家も知らないことがたくさんあり、予想外の何かに気が付けるかどうか、それが魚部の野外調査の醍醐味であり、魅力となっていた。同時にすでに存在していた、仮設実証型の生物部は身内完結型に見え、井上先生が目指すものとは異なるようになっていった。

このことから、「高校生らの今の社会への問題提起」として、活動の成果を出し惜しみしない！というコンセプトで、展示会、観察会・お話し会、図鑑制作、保全・保護活動を行い、高校生たちが調べた地域の生の情報、最新の情報、地元の情報など魚部オリジナルの情報を提供し続けた。その結果、展示では水環境館で11年に及ぶ活動や図鑑は5冊を発行する

に至った。図鑑の制作には必ず専門家の方々に協力いただき、間違っただけの情報がないかなど、図鑑としての精度についても十分に留意していることが補足された。作成された図鑑は、地域の理解と共感を得ることまでいけたらその「場所」や「生物」は守られる可能性が高くなるかもしれないと考え、福岡県や北九州市へ贈呈するとともに、地域の環境イベントや観察会、ゲストティーチャー、講演会などで活用、案内など普及活動も行った。

これまでの活動から魚部の活動とは、知ること（調査を通じて、自らが体験的に現状を知る）・伝えること（調査成果をダイレクトに社会に反映させる）・守ること（早急に手を打つべきものは、保全を考える）、ということだという結論に至った。

このころになると魚部は県内でもかなり有名な存在となっていたが、井上先生が転勤となることが決まり、活動の存続について井上先生もかなり悩むこととなったそうだ。しかし、とある方から「魚部はあなただけの魚部ではなく社会的にも大切なもの。」と言われ、1. 「魚部」という存在への世間のある程度高い認知度、2. 魚部提供の多様な企画を通じて、身近な自然を知り考える機会ができる、3. 自分たちの街には魚部がいる！ことが啓発の第一歩になるかも、という点からわが街自慢的な存在、にもなれたらいいかもしれないと願い、現在の誰でも参加できる「北九州・魚部」として継続することを決意した。

再スタートした魚部だが、お金がない中で、まず任意団体に結成することになるが、お金も場所もなく困っていたところ、地元の企業さんが「地元のためにできることをしたい」という意向から、地元のための活動を行っている魚部に対して、格安で会社の二階を魚部の拠点として貸し出してくれることになった。そのおかげで、現在も魚部の基地として多くの人が集まる場となっている。

2015年1月10日の出発会では35名だった。これまでの高校の部活動から市民（街）の部活へと変貌し、展示会などの準備も高校生がすべて行っていたのが、アマチュアメンバーの活躍の場となり様々な魚部のメンバーが準備を協力して行っていくことで、会が成り立っている。新たな魚部は1. 「場」を作り、2. 「野」に出て、3. 「人」に伝える取組となっており、まさに老若男女問わず活躍できる場となっている。

会の運営にはどうしても資金が必要であるため会費をいただくが、その会員へは魚部メンバーとのわくわくする雑談を読み物という形で多くの人と共有できたら面白いのではないかとこの思いから「会誌」でも、ある地域限定の「ローカル誌」でもない、新ジャンルの雑誌になるものとして、『ぎよぶる』という雑誌を会員に配布している。また、それ以外にも『ぎよぶる』の発行に連動した企画として、魚部ならではのクラブ復興へのエールとして、島の美しさや豊かさそれを誇りに思う島民の思いをぎよぶる4号特集として掲載・発行し、それに合わせて島の子どもたちの詩と写真展を北九州・福岡・下関で開催した。会費は活動資金を集めることが目的だが、ぎよぶるを発行するとほぼいただいた会費を使い切ってしまう状況で、なかなか活動資金を集めるのにご苦労されているとのことだった。参加者の方々へは神奈川県立博物館（生命の星・地球博物館）にも販売されているので、

是非手に取っていただきたいとのお願いもされていた。

これらの活動から、現在では前述の通り、全国 25 都道府県の約 250 名が参加する非常に大きな会となっている。

魚部の活動の中で、井上先生が印象的なエピソードとして、とある夫婦のお話をしていた。50代の夫婦で魚部の活動されている方のお話で奥様から「趣味もぜんぜん一緒じゃない。好みですら、茶碗一つとっても全然ちがう。子どもたちが巣立ち仕事を退職し夫婦二人きりの人生になる前に魚部に入部してよかった」と言われたことがあったそうだ。当初、魚部への参加は奥様が主で旦那様は「付いてくる」という感じだったが、半年、1年と経ち、魚部基地での集まりに1人で参加するようになる。それだけにとどまらず、外でのイベントにも単独で積極的に参加するようになってきた。奥様は夫の知らない一面だったのか、あるいは変化なのか？と非常に驚いたようだった。それだけではなく、日曜日でも午後から「あそこの川、ちょっとのぞきに行こうか」と、夫婦の意見がぴったり合っけたり出かけたりするようにもなった。旦那様は不愛想で、近所でも挨拶もしない方だったが、夫婦で近所の川で「ガサガサ」と生き物の観察するときに通りがかった人に自分から話しかけるようになったとのことだ。奥様曰く「まったくそんな人では無かったのに・・・」とお話され、また旦那様は「最近の私は怪しい人です。水辺を見るときよろきよろきして。」と話すほど、今では展示作業にも欠かせない一人になっている。これについて、井上先生は変えたのは「魚部と自然の力」？ではないかとしみじみ感じているようだ。

最後のまとめとして、フィールド(=ギョブリ)がもたらすものは、①生(いのち)の実感、②自身が持つ知的好奇心や探究心の再認識、③目の前の「世界」の重層性への気づき、を挙げ、フィールドでの体験で得た独自の直感や論理、快感をもとに、自らの価値観を個々に形成し、世間の流行や権威あるものと無関係で自発的な行為が、魚部員にとってのフィールドワークであり、世代を問わず、「魚部経験」を通じた生き方の質的变化を涵養と説明された。また、自分も生きものなのに「生きものの匂いを嫌う」私たちでも、「エコとかESDとか」取りあえず口にする私たち(世の中)に対して、こんな世間の感覚に対して生き物好きがメッセージ発信を続けると述べられた。